

小野門跡と

日野薬師

水野恭一郎

伏見区醍醐の名刹醍醐寺をはさんで、北に「小野門跡」随心院と、南に「日野薬師」法界寺がある。いずれも醍醐の山並みを背に、その西麓の景勝の地を占めて建つ真言宗の古刹であるが、醍醐寺の著名さにくらべて、この小野・日野の両寺を訪ねる人は比較的少ない。両寺とも古くは山城国宇治郡の内であるが、現在の行政区画では、随心院は山科区小野御霊町、法界寺は伏見区日野西大道町である。

随心院のはじまりは、平安中期の寛仁二年（一〇一八）に、醍醐寺を開いた聖宝から五代の法孫にあたる

仁海^{にんがゐ}によって開創されたもので、当時は牛皮山曼荼羅^{まんだら}寺と称した。この寺号の由来については、『真俗雜記問答鈔』に載せる「小野曼荼羅寺名事」によれば「小野雨僧正（仁海）夢想ニ、我母何ノ国ニ成レ牛有由示レ之、彼ノ牛ヲ尋得テ一期養育シテ、死後彼ノ皮ヲ剥テ、画ニ両界曼荼羅、安ニ置彼寺、依レ之号ニ曼荼羅寺」と伝えている。なお『古事談』（第三、僧行）には、この伝えを仁海の母ではなくて亡父のこととしている。また前掲の『真俗雜記問答鈔』の記事に、仁海を「小野の雨の僧正」と記しているが、これは仁海がしばしば勅によって請雨経法を修したことに由来のものである。『秘密宗要文』（第十五、僧正仁海）によれば、寛仁二年の夏、炎旱がつづき穀物稔らず、大極殿において祈雨の読経を行ない、また諸社に祈雨奉幣使が遣されたが、その効のなかったとき、「仁海六月四日俄蒙宣旨、於神泉苑奉修請雨経法、第五日雷起、四方大雨降注、（中略）從第九日巳時、三日三夜大雨降注、七道諸国播植苗稼」と記し、また小野宮右大臣実資の日記『小右記』（寛仁二年六月八日の条）にも、「神泉御修法間、甘雨快降、弘法大師遺法驗德揭焉、阿闍梨仁海真言膺輩、令初修秘法、令降甘雨、尤可帰依（中略）仁海靈驗甚以揭焉也、早可被任僧綱云々」と記されて、仁海の請雨経法の効

験に感歎している。そしてやがて後一条天皇から、その祈雨の功を褒せられて八月十六日権律師に任ぜられている。このとき以後、仁海は祈雨修法の勅を拝すること九度に及び、世に「雨の僧正」と呼ばれて崇められた。

仁海はまた東密（とうみつ真言密教）事相（じそう）の小野流の始祖でもある。東密の事相には、大別して醍醐寺の聖宝の流れを承けるものと、御室仁和寺の益信の流れを承けるものがあり、このうち醍醐寺を中心とする東密事相は、小野曼荼羅寺の仁海によって完成されたので、これを小野流といい、一方、仁和寺を中心とするものは、宇多法皇の皇孫で、広沢池のほとりに遍照寺を開き「広沢僧正」といわれた寛朝がこれを完成したので、広沢流と呼ばれている。小野流は仁海のと、その法孫範俊の弟子嚴覚の法門から随心院の増俊、勸修寺の寛信、安祥寺の宗意が出て、小野三流が成立し、また同じく仁海の法孫義範の弟子勝覚の法門から醍醐寺三宝院の定海、理性院の賢覚、金剛王院の聖賢が出て、醍醐三流が成立するが、更にこの小野三流と醍醐三流を合わせて小野六流と称している。仁和寺の広沢流も寛朝のあと、広沢六流が分立することになるが、小野と広沢の両六流を合わせて、また東密事相の「野沢根本十二流」とも呼ばれるようになる。いずれにし

ても随心院（曼荼羅寺）は、仁海を始祖とする東密小野流発祥の由緒ある寺院である。

仁海によって開創された曼荼羅寺の中に、その子房として随心院が創設されたのは、曼荼羅寺五世の増俊のときである。増俊は前述のごとく東密小野三流の一つ随心院流の祖となった僧である。その後、鎌倉時代のはじめ六世顯嚴のときには、随心院は朝廷の御祈願所となり、また次の七世親嚴は承久元年（一二一九）



随心院本堂と庭園

七月旱天のとき、仁海のとくと同様に、後鳥羽上皇の仰せによって神泉苑において祈雨修法を行なつて効験があった。『仁和寺御日記』の承久元年七月十九日の条に「神泉御読経結願也、自去十四日被_レ始_レ行之、権僧正親嚴」とあり、同廿七日の条には「権僧正親嚴申、以_レ神泉苑祈雨御読経賞、御祈願所随心院被_レ加_レ置阿闍梨二口ニ事、依_レ請被_レ下_レ宣旨」とあつて、祈雨効験の功によって随心院に阿闍梨二口が加え置かれてゐる。（『本朝高僧伝』には阿闍梨五口を賜り置くとしてゐる。）親嚴はまた東寺長者にも補任されているが、承久の乱後も後堀河天皇の厚い帰依を得、寛喜元年（一二二九）五月に東寺へ下された官宣旨に、讃岐国の善通寺および曼荼羅寺を、権僧正親嚴の門跡に付する旨が述べられてゐるので、このころ随心院は門跡寺院となつてゐたことがうかがえる。親嚴は貞永元年（一二三二）には大僧正に任ぜられたが、親嚴のとき以来、同寺は随心院門跡あるいは小野門跡と呼ばれて寺運殊に榮えたのである。

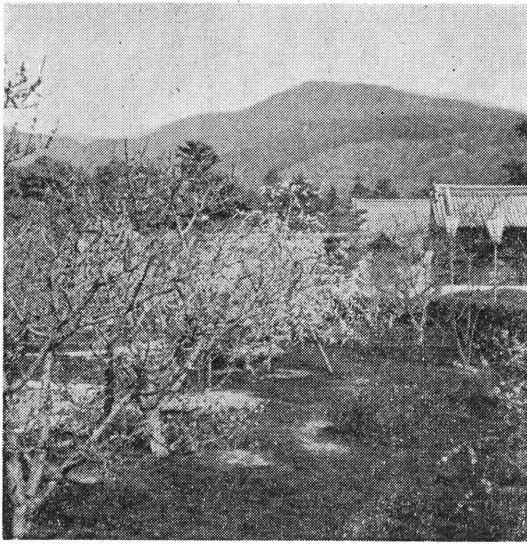
しかし室町時代、応仁・文明の大乱中、文明二年（一四七〇）七月中旬に西軍の將大内政弘の軍勢が東軍を醍醐・山科に攻めた合戦に、醍醐寺の諸堂舎（五重塔のみ残る）とともに、随心院も兵火に全焼して、一時衰微の時期を経過した。現在の本堂は慶長四年（一五

九九）に二四世増孝のとき再建されたもので、このころ以後また徳川幕府の保護を得て、寺領六〇〇石余を与えられ、九条家・二条家などから門跡が入山して寺運は再興した。当寺の本尊は如意輪觀音坐像（秘仏、鎌倉時代）であるが、そのほか本堂には阿弥陀如来坐像（重文、平安後期）や金剛薩埵坐像（重文、鎌倉時代）も安置され、金剛薩埵像には像内に「巧匠法眼快慶作」の朱書銘がある。

随心院のある宇治郡小野郷は、古代の豪族小野氏の居住地であつたことから、この随心院のあたりは平安時代の歌人小野小町の邸址であるとの伝承が生まれ、本堂の裏の木立の中に小野小町の文塚（深草少将をはじめ人々から寄せられた千束の文を埋めたという）、境内の西南隅に小町の化粧井戸と伝える井戸などもある。また本堂安置の地藏尊像も、小野小町の文張地藏と呼ばれてゐる。当寺の前庭には広い梅園があり、これは昭和四十一年から造園された新しいものではあるが、「唐棣_{（はなづ）}の梅」と呼ばれる厚物の紅梅で、三月下旬に庭一面に花を開いたときの風情は目を奪うばかりで、近時京都で最も美しい紅梅の名園といつてよい。毎年三月三十日には、この梅花にちなんだ「はねず踊り」も境内で催されてゐる。

随心院から醍醐寺前を過ぎて、奈良街道の古い町並

を南へおよそ三キロメートル、石田から左折して東の山裾、日野の里に法界寺（日野薬師）がある。日野の里は北家藤原氏の一流である日野家の山荘のあったところで、ここに法界寺が営まれたのは、随心院の草創から三十年あまりのちの永承六年（一〇五一）、日野資業が出家するにあたって、この地に薬師堂を造立したのにはじまるとされている。『叡岳要記』に載せる「日野薬師事」の記事には、「伝教大師自造三寸像、太政大臣房前孫子左大臣内膳、自慈覚大師御手奉



随心院の梅園

伝^レ之、為^ニ本尊^一相統及^ニ数代^一、資業三品之時、造^ニ大仏像^一、奉^レ納^ニ御身^一畢、建^レ寺号^ニ法界寺^一」と記し、また『帝王編年記』には、「弘仁十三年六月、参議左大弁藤原朝臣家宗、可^レ立^ニ戒壇^一之由、带^ニ宣旨^一登山、伝教大師不^レ耐^ニ悦喜^一、以^ニ七寸薬師像一鉢・太刀一腰・多羅葉薬師經一卷与^レ之、今日野本仏是也云々、同六月四日大師入滅」と、やや異つた所伝を載せている。しかし『帝王編年記』に伝える弘仁十三年（八二二）には、家宗は未だ六歳で、年代的に疑問があり、『叡岳要記』の方は年紀を缺いてはいるが、一応この所伝に従えば、藤原内麻呂が、伝教大師自作の薬師如来の小像を、慈覚大師円仁の手から授かり、それが持仏として数代日野家に伝わっていたのを、資業が法界寺を造立したとき、同寺の本尊として新たに薬師如来像を作り、伝教大師の小仏をその胎内に納めたというのである。この伝承をもつ薬師如来立像は、現在も法界寺薬師堂に秘仏として安置されているが、像高八八・五センチ、藤原時代の様式をもつ白木造の檀像（重文）で、日野の薬師として古くから信仰を集め、殊に胎内に小薬師像が納められていることから、いつしか「乳薬師」とも呼ばれて、安産や授乳を祈願する参詣者が少なくない。

日野資業が法界寺の薬師堂を創建したのにつづい

て、資業の子実綱が、永保元年（一〇八一）に、その娘の菩提のために同寺内に観音堂を造立している。この実綱の娘は権大納言藤原宗俊の室で、『中右記』を書いた中御門右大臣宗忠の生母である。『中右記』の

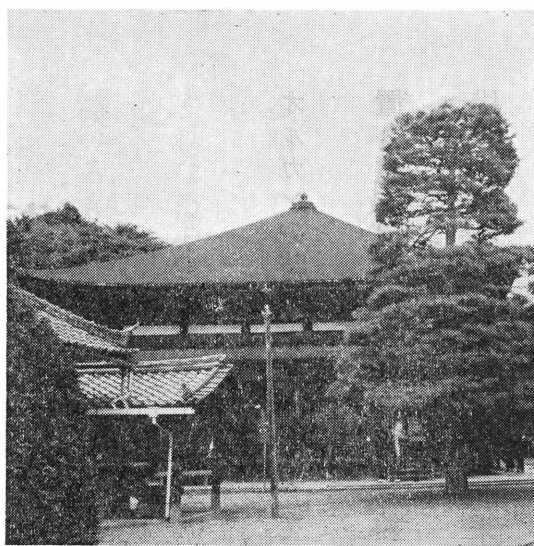
寛治六年（一〇九二）九月二日の条に、宗忠が南都の春日社・南円堂に詣でたことを記しているのにつづいて、『帰洛之次、参向日野観音堂』（中略）件日野は故伊与三位入道（資業）所建立道場也、伝教大師自作給薬師仏安置其中、是一家之大宝也、至観音堂、故備中守（実綱）建立」とあって、宗忠も亡母にゆかりの日野の観音堂に参詣している。その後、法界寺には更に諸堂が相ついで建立されたらしく、『中右記』の元永元年（一一一八）五月五日の条には「今日遠忌也、仍晚頭入日野、（中略）於阿弥陀堂、以僧六人供養」とあり、また元永二年五月十九日の条には「今朝經布送日野丈六堂了」との記事も見え、丈六の阿弥陀如来像を安置した阿弥陀堂もこのころ出来上っていたことがうかがえる。更に、同じく『中右記』の保安元年（一一二〇）八月十五日の条に「早旦入日野、相営塔事、從今日可_レ在日野也」とあり、つづいて八月廿二日の条に「天快晴、今日年来所造営之日野法界寺中塔婆、所供養也、早旦講師権律師忠尋来、先有鎮壇事、任注文五宝五藥等相儲、令

埋堂地也、（中略）巳時許、塔莊嚴畢」とあって、法界寺の塔も建立され、宗忠もその落慶供養のために数日間、日野に滞在している。

このようにして法界寺には薬師堂の創建につづいて、数十年の間に堂塔がつぎつぎに造立されて、寺域も拡大され、盛観を呈するに至ったのである。しかし鎌倉時代に入ってから以後は、承久三年（一二二一）承久の乱の際の兵火をはじめ、幾たびかの火災によって次第に伽藍を失い、殊に室町時代、応仁・文明の大乱に、随心院の場合と同様、文明二年七月中旬の兵燹によって、法界寺の堂舎も薬師堂・阿弥陀堂を残して焼亡したらしく、大永六年（一五二六）のころ、この地を訪ねた連歌師宗長も『宗長手記』の中に、「日野七薬師門前より杖にて、まことにさひしく哀に、あらしにまよふ落葉、仏前のふるき戸帳に吹まよひ、車のわれここかしこにちりほひ、むかしおほゆる心ちして」と、その衰微のさまを記しているが、その後、更に、薬師堂も天正年中に火災にかかり、以後は阿弥陀堂を残すのみとなった。永承六年薬師堂創建のとき以来の本尊の薬師如来像は、幸い焼失をまぬかれて、その後は長く阿弥陀堂へ移して奉安されていたが、明治三十七年に至って大和竜田の伝燈寺の本堂を移建して、漸く法界寺薬師堂が再興された。この新薬師堂の棟木に

は康正二年（一四五六）の銘があり、室町中期の建造物（重文）である。

法界寺の堂塔のうち平安時代のものとしてただ一つ残された阿弥陀堂（国宝）は、宇治平等院の鳳凰堂などと並ぶ藤原時代の代表的な建造物で、五間五面、檜皮葺、宝形造の御堂の姿は美しい。堂内の内陣はすべて極彩色で荘厳され、殊に漆喰地の壁間に画かれた飛天の壁画（国宝）は、法隆寺金堂の壁画が焼けた今日では、完全なものとして最も古く、しかも秀れた作品



法界寺阿弥陀堂

である。格天井に画かれた宝相華も、美しい色彩が今なお鮮やかに残っている。阿弥陀如来坐像（国宝）は、鳳凰堂の阿弥陀如来坐像（定朝作）とほぼ同じ様式で、恐らく元永年間に阿弥陀堂が造立された当時のものであろう。兵部卿平信範の日記『兵範記』の保元二年（一一五七）四月廿二日の条に「殿下（関白藤原忠通）渡御法性寺殿、今日密々令向日野給、文六堂阿弥陀仏、依定朝造、可令拜見給之故云々」とみえており、法界寺の阿弥陀如来像が、確証はないが、既に平安末期のころから定朝作といわれていたことを知ることができる。法界寺は、その創建の由来からすれば、はじめ天台宗の寺院であったことは確かであるが、室町初期のころ、醍醐寺との関係が深くなっている。以来、真言宗に転じ、現在も真言宗醍醐派に属している。

なお日野の里は日野家の山荘の地であったことから、法界寺を開いた日野資業の曾孫有範の子といわれる親鸞上人も、この地で生まれ、幼時から法界寺の阿弥陀仏を礼拝していたとの伝承があり、いま「日野誕生院」と呼ばれている御堂が、江戸末期のころ真宗の僧侶によって、法界寺の東に隣接して造られ、真宗門徒の信仰の地ともなっている。

（みずの きょういちろう 文学部教授）